あ　い　さ　つ

金沢大学教育学部附属養護学校
校長　山口　勢

養護学校教育の現場に、児童生徒の障害の重度・重複化、多様化ということばが使われ出した頃、養護学校の教育に携わる者が、近々現実になると予想される重度化に対して、ある種の不安や戸惑いを感じていた時期があったと思います。そして昭和54年の養護学校教育の義務制実施の前後から重度化が現実となり、このことへの対応が否応なく迫られてきました。多くの学校で研究テーマとしても取り上げられていたと思います。私たちは集団活動の中で個に働きかけ個を生かしていく集団学習と、個々の子供に一対一の形で行う個別学習の両面で、重度化に対応する実践を続けてきました。

集団学習では、全校集団や小・中学部及び高等部などの集団ですすめる学習、全校集会や各部の朝の会などの活動について取り組んできました。ここでは、集団でつくり上げる生活や集団でしかできない生活があることが確かめられ、子どもたちの間に年齢差や能力差を越えてお互いに育ち合う姿が見られたことが大きな収穫だったと思います。一方個別学習では、言語や動作技能などに関する治療的教育が中心となりました。

このような経緯の後、私たちは昭和63年に「発達と障害に応じた指導」のテーマで研究に取り組み今年で５年目になります。私たちはこのテーマのもとに、より具体的ないくつかの研究課題を設定し、全員がどれかの研究グループに所属するという体制のもとに研究を進めてきました。

「発達と障害に応じた指導」のテーマは、本校の教育目標である「心身の発達に遅れや障害のある児童・生徒に対して、その実態に即した指導を行うことにより、一人一人の全面的な発達を促し、その子らしく精いっぱい生きる力を育てることを目指す」の精神を端的にあらわしており「一人一人の児童生徒を知ることから全てが始まる」と言われる特殊教育にとっては、永遠の課題だと思っています。

また、個々の研究課題は私たちの日々の教育実践の中から生まれた問題点を中心に取り上げたもので、私たちの関心が集約されていると言えようかと思います。

このように私たちの研究課題は具体的で身近なものであり、日々の学習指導と研究活動が表裏一体となって進められ、一応それなりの成果を得たと思われますので、今回、一旦本課題による研究を終了し、次の段階へ発展的に引きついでいきたいと思います。

本紀要を、５年間の当研究のまとめといたしますが、不備な点が多々あることと思います。昭和63年度から平成３年度までの４部と合わせてご覧頂き、忌憚のないご叱正を賜わることができれば幸いに存じます。